

小泉荻三 年譜

上田 博

はしがき

本年（二〇〇四年）、小泉荻三先生の生誕百十年を迎える。先生の創設になる「ポトナム短歌会」（前代表和田繁二郎先生、現代表金子元英氏）は記念して『小泉荻三全歌集』（短歌新聞社）を刊行する。同書巻末に、國末泰平氏、安森敏隆氏の協力を得て「略年譜」を付したが、頁の關係で歌文の省略を余儀なくされたので、原「年譜」を掲載することにした。基本内容に重複のあるのはそのためである。『全歌集』を読んでいただくことを希望するが、刊行部数が少なく、手にする機会のない人には、本誌「年譜」は便利であろうかと考えたのである。重複についての事情を賢察願いたい。なお、「年譜」昭和二十二年の項の、小泉先生の「公職追放」については、白川静博士が「蘆北先生遺事」と題して「立命館文学」（五一—号 平成元年六月）に当時の複雑な学内事情を証言されているので、参考にしていただきたい。

年譜

明治三十七年（一八九四）四月四日 神奈川県横浜市戸塚矢部町八

一番地に生まれる。家業は茶舗。本名、藤造。父、藤治、母、ヨネの長男。なか、あきの二姉。

明治四十一年（一九〇八）一四歳 四月、神奈川県立第一中学校入学。

大正二年（一九一三）一九歳 三月、同校卒業。このころ第二次

「車前草社」に入会。

大正三年（一九一四）二〇歳 四月、東洋大学専門部二科（夜間部）に入学。歌誌「水薨」創刊に参加し、筆名「藤三」とする。

姉の子と我とが遊ぶ映の家に二房三房赤き南天（四月）
横浜の停車場の隅四五人の人間が貨車を推してゐたりき
（五月）

松本樓の白テーブルを林間にかつき出して友と酒くむ

(七月)

藤三「水甕」大三・四(同八)

峡底の冬のまちはもまさびしく一すぢの川しらひかりたり
汽車が走れば真赤な落日ひた走る木立を透きて真赤な落日
青山の糸物店はさむきかもしまのきぬつけいとまくわれに
糸をまく指さき寒みあはれかも絹糸のもつれわれのとき
えず

はしきやし少女来たりて糸買うと店に立ちたり少女来たりて

藤三「落日」(「水甕」大五・二)

大正六年(一九一七)二三歳 三月、東洋大学専門部二科を卒業。

七月、中等学校国語漢文科教員無試験検定合格。深川に養魚場を開く。

大正八年(一九一九)二五歳 堀江登喜と結婚。

大正九年(一九二〇)二六歳 福井県北陸中学校教諭となる。九

月二八日、長男清生まれる。

大正一〇年(一九二二)二七歳 一月八日、父藤治逝去。七月、

埼玉県川越中学校教諭となる。この頃歌誌「聖土」を創刊。

大正一一年(一九二二)二八歳 一月、京城公立高等女学校教諭。

「その頃の私は一個のトルストイアンであつて、相馬御風氏のものなどを愛読してゐたやうに覚えてゐる。(中

略) 全く百姓もしくは金魚屋として過したわけである。

(中略) 印半纏に繩の帯で働いてゐたり、京城駅へ着いた鰻を荷車に積んで南大門黄金町通東大門清涼里と、息を切らして走つたりしたものである。私が初めて京城で先生になつた時、近所の人達は私が東大門の小学校先生に出世したと云うて、酒をもちこんできた。」 芑三「私と朝鮮」(「ポトナム」昭二・四)

四月、百瀬千尋と「ポトナム短歌会」を創立、「ポトナム」を創刊。「野に立ちて」を創刊のこととする。

「大正十一年一月、京城日々新聞社主催の全朝鮮短歌会が開かれ、会するもの四十余名、閉会近く一隅から重い口をひらいた小泉藤三(芑三)に、千尋は一瞬強く惹かれた。雨傘を持たないので有名な、女学校の教師でしかも安甘川養魚池の主人は、土臭い容姿ながら、「夕潮」の出版を前に熱情をひそめていたのであつた。二月二十一日、千尋は安甘川の藤三を訪問、即日短歌雑誌創刊から、誌名「ポトナム」、同人の顔ぶれまで決めてしまつた。五日後、四條派の絵を描く千尋自筆の絵葉書による勧誘状を持参、二人の手で、創刊宣言文、挨拶状を作り、創刊言のビラは大通り大商店の飾り窓に貼つてもらふことにした。商店主は満鉄京城管理局購買部勤務の千尋の

顔見知りの店だったので、すぐ賛成、協力してくれた。三月二十三日、彼岸の中日とはいえ外では吹雪が吹き荒んでいた。ぎいぎいと家鳴りのはげしい家で、火桶の火をかき立てながら、やつと創刊号の編輯を終った二人は、ほっと顔を見合させた。茅三が高くさし上げたランプの灯をたよりに外へ出ると、道は雪に埋まっていた。」

百瀬桂「(父を語る) 安甘川の二人」

〔ポトナム〕 八〇〇号記念 平四・一二

ポトナムの直ぐ立つ枝はひそかなりひと時明き夕べの丘に
庭垣のポトナムの芽はふふめどもあけくれをいまだ寒き
風ふく
うつつなく吹きゆく風の見ゆるかも庭につづける白楊の
垣に

藤三「白楊」〔ポトナム〕創刊号 大一一・四 表紙

こもりぬのうら寂しさや窓ゆさす陽の暖き春とはなりつ
空わたる日の光さへおのづから明るくなりて春は来にけり
青空に湧きてただよふ雲多しさす日のひかり春めきに
つ、
日の光うすれゆきつ、暮れそむる空の色より寂しきはなし
春の空を愛しきものとは思ひしが仰ぎ見つ、さらに愛し

く思ふ

夕ぐれを空ならしゆく風出でて雪はみだる、小窓の外に
さらさらに降り来し雪の夕まけて小降りとなりつしばし
明るき

朝よりの雪ふりやみて夕ぐれぬ空しき思ひに耐へてわが
居り

藤三「春雪」〔ポトナム〕創刊号

「この頃の朝鮮の自然は殊に寂しい、殖民地特有のポプ
ラは、落葉しつくした枯枝の細かな直立の姿を、澄み徹
つた冬空に高くひろげて居り、松の間から赭土の断崖や
山巒などの、判然見える低山性の山脈には、弱い冬の日
光が、微妙な、無限に似た輝きを見せ、その山頂と真蒼
な空との境界のあたりを、時としては、はやくも春らし
い明るさを持った白雲が、悠々東の方へ流れて行くので
ある。厳然たる落日の最後の光炎、夜の空にきらめく星
は特に美しい。それは、内地にあつてみるよりも幾倍の
清純さと、地上への近さとを、もつてゐることであらう。
かつて、私は、私の愛する人と共にあつて、月を仰ぎ夜
の海の静寂さを味つた。いま、私はひとり嘆きと焦燥と
のうちに、そして自然の永遠性に対する押へ切れぬ憧憬
を感じつ、朝鮮の山川に対してゐる。しかも、このほん
の瞬間の自然に対する法悦境より生ずる感激が、私の心

に向つて、微かながらも、純化と洗練と、統一とを教へてくれさうな気さへしてゐるのである。」

小泉藤三「野に立ちて」(「ポトナム」創刊号)

深川の洲崎のうみのなつちかみ病みてゐる子をあはれと思ふ

その眼の涙ぬぐふとひそやかに娘は窓のべにより立てるかも

生命ありてこの草山の草をしきこれのわが世の愛しくなれり

おくつきに散りたる松の葉を見れば父埋めし山に多き松の樹

はりつめし水の中に金魚ゐて尾鰭ひろげて死にたるあはれ

【夕潮】(八月)

大正二年(一九二三)二九歳 一月、筆名を「琴三」と改める。

八月、水甕社を退社。

「彼は東洋大学へ入学すると同時に明治大学で経済学か商学かを学んでいた。大正六年東洋を卒業する頃から深川に養魚場を開いて相当大仕掛けに金魚を養殖し、着々その成果をあげていたのであつたが、同年九月三十日夜の突如として起つた関東地方大津波によつて跡形もなく洗

い去られて、彼はその間に辛うじてたすかつたこともあり、続いて某会社を組織して、いよいよ仕事の緒についた頃、経済界の大不況に禍いされて資本の大半を喪失したこともある。」

小野教孝「畏友小泉君」(「ポトナム」)

小泉琴三先生追悼号 昭三二・五

大正一三年(一九二四)三〇歳 二月、東京府立第一商業学校教

諭。五月、「ポトナム」を休刊し、「橄欖」と合併。

大正一四年(一九二五)三一歳 一月、「ポトナム」を復刊、第

四巻一号とする。十一月、次男洵生まれる。

大正一五年(一九二六)三二歳 五月、「評釈 大伴家持全集」

昭和二年(一九二七)三三歳 七月、高等学校国語科教員試験検

定に合格。十二月、新潟県立新潟商業学校教諭。

昭和三年(一九二八)三四歳 登喜と離婚。

昭和五年(一九三〇)三六歳 三好桂子と結婚。九月、長野県立

女子専門学校教授。夏期講習で久松潜一と初対面。「ポト

ナム」に「短歌講座」を開いて、近代短歌研究をスタート

し、若手の研究者の養成を目ざした。

昭和七年(一九三二)三八歳 九月、立命館大学専門学部文学科

教授。

昭和八年(一九三三)三九歳 一月、「ポトナム」誌上に「現実

的新抒情主義短歌の提唱」を発表し、今後の指針とする。

昼の雨あかるく降るやひそかなる嘆のありと人は知らざらむ

見はるかす日本と思ふ空とほしほのけき雲に春日かがよふ
天づたふ月よみのひかりながれたりしらじらとして遠き
草原

職を賭してわがなすことを愚なりと誨ふる人ら職を惜めり
寂しさは極るにちかしふかふかと曇れる海にむかひて眼
をとづ

歌集「くさぶち」(四月)

「文学が我々の肉体的行動であるならば、そして肉体的行動であるために光り得るものであるならば、たとい短歌が微小な一詩形に過ぎぬとしても、その中に我々の肉体的陰影を余す所なく、投射すべく試みねばならない。過去が我々の肉体の上に落しているあらゆる陰影が、その核心が、詩形に凝集されて、キラキラと光輝するときこそ、始めて其歌は高い位置におかれる。一首の表現にあたっては、その一首に、一首以前のすべてを注ぎこまねばならない。其処に現実感の核心把握する彫心の苦もあるであろう。現実感を具象的に表現することは、比較的自由なかの自由律詩形をもつてすら、詩人達が骨をけずっている所である。ましてや短歌においては、短歌形式と言う不可避な厳重な拘束がある。そしてこの拘束と

相抗して、これを克服しなければならぬ。」

小泉茅三「短歌の方向 現実的新抒情主義短歌の提唱」

〔毎日新聞〕昭七・一一・一六―二三

昭和九年(一九三四)四〇歳 一月、「立命館文学」を創刊し、編集主任となる。十月、『正岡子規根岸短歌会の位相』

昭和一〇年(一九三五)四一歳 四月、立命館大学専門学部文学科主事。

昭和十三年(一九三八)四四歳 四月、「明治大正歌書年表増補

版」により、第一回日本歌人協会賞を受く。十二月、陸軍省嘱託として北支・中支に従軍。

昭和一四年(一九三九)四五歳 四月、中国より帰国。

昭和一五年(一九四〇)四六歳 陸軍省嘱託を解かれる。六月、立命館大学より向う三か年中国へ出張を命ぜられ、国立北京師範大学教授を兼任する。「明治大正短歌資料大成(歌論集成)」(第一巻)九月、「近代短歌の性格」

戦いに死にて行きたるつはもの墓標並べり川沿ひの駅に
死ぬべくは静けくあらむと思ふさへ現身の身はただに虚
しき

切開して呼吸を保たしめんといふ軍医の声がうつつに聞ゆ
砲隊鏡にうつる奏嶺山脈は突兀として寂しきに似つ
黄河の流に浮ぶ屍はこの岸辺をさらずただよふ

亡骸は敵と味方を分たためや弾飛ぶなかに曝されてあはれ捕らはれて歎くを知らぬ少年の明日の運命をひそかに想ふ地の涯の戦線にして妻のもとに金届けたしと兵の言ひ出づ慎ましく差出す紙幣皺み居り肌身に長く添へて来たりし東亜の民族ここに闘へりふたたびかかる戦なからしめ

歌集「山西戦線」(五月)

昭和一六年(一九四二) 四七歳 四月、立命館大学法文学部国文学科が創設され、教授となる。「明治大正短歌資料大成(歌書綜覧)」(第二卷)。五月、華北日本語教育研究所員を兼任する。

昭和一七年(一九四二) 四八歳 四月、『明治大正短歌資料大成(短歌大年表)』(第三卷)。九月、国立北京外国語専科学校 上席教授を兼任。

昭和一八年(一九四三) 四九歳 四月、立命館大学より中国出張を解かれ、立命館大学に帰任。

昭和一九年(一九四四) 五〇歳 三月、「ポトナム」第二二卷三号(通巻二五四号)をもって休刊。四月、雑誌統合の国策により「アララギ」と合併する。

昭和二〇年(一九四五) 五一歳 二月八日、長男小泉清、輸送船団にて台湾沖(高雄州ガランピ方面)南下中爆撃を受けて戦死。

昭和二二年(一九四六) 五二歳 出版社白楊社を組織する。

街並はやけたるままに戦に敗れてたる年ゆかむとす
地の上の人の営みかくしありて大き廃墟を今のまことに
接骨の一樹の蔭につつがなく鳴雪子規の碑ならぶ
正岡家のさびし墓石すでにして傍の土に草青みつつ
圍繞む家並は焼けてしらじらと立てるみ墓に日当るしみに
らに(松山 正宗寺)

昭和二三年(一九四七) 五三歳 一月、旧ポトナム同人を中心として歌誌「くさふち」(羽田書房発行)を創刊。三月、『歌人子規とその周囲』。四月、『これからの短歌の味ひ方作り方』。六月、昭和二二年政令第六二号第三号第一項(教職不適格)により立命館大学教授の職を免ぜられる。

昭和二三年(一九四八) 五四歳 四月、『正岡子規』

昭和二四年(一九四九) 五五歳 一月、「くさふち」選者制をとる。十二月、有限会社白楊社を株式組織に改め、編集顧問となる。

昭和二六年(一九五一) 五七歳 一月、「くさふち」の誌名を「ポトナム」に復す。四月、ポトナム復元三〇〇号記念大会。九月、教職不適格としての指定を解除される。

「今の歌壇に新風と目される作品は決して少くはないやうである。しかしその中には、依然たる身辺雑報や既製の感傷を、新しい事象や、新奇な或いは蔽めかしい語彙

によつて装うてゐるものを見る。真の新風はこれらとは無縁のものである。真の新風は次代の普遍的な真実をはらんだ抒情でなければならぬ。しかしその新風は多くの人達には容易に理解され難いものをもつてゐることは争へない。それは、それらのより現実なるものの把握が、知的にしる直観的にしろかなりの努力を要することでもあり、更に詩的燃焼より、定型への圧縮的表現といふ作歌の全過程に互つて新しい試みが行はれるからである。凡そ新風は常に多数の無理解によつてとるを得ないやうであるが、幸ひくさふちにおいては、この対立は避けられてきた。新風はやはり社中のすべての人々の支持なくしてはその十分な成長を保証されないであらう。支持するといつても、理解し難いものを尊しとするやうなものではなく、それらを理解しようとする誠意をもつて接してもらひたいと思ふのである。」

「真実・抒情・新風―「ポトナム」復刊に際して―」

〔ポトナム〕昭二六・一

東西ただならぬ世相のけはひさへ身に近くして年の暮れ行く
慌しく変り行く世相に時にもまれて吾のなげくことあり
耐へ耐へて行かむ思ひもおのづから限りのありてした嘆

くなり

石の上にも三年といふやや軌道に乗りたるらしくひそかに思ふ
庭土に桐の落葉のちらばれるが一葉ごとに月にぬれて光れり

「歳暮」〔ポトナム〕昭二六・一

昭和二七年（一九五二）五八歳 十一月二十一日、「明治和歌史の研究」により文学博士の学位を受ける。（東洋大学提出）

昭和二八年（一九五三）五九歳 四月、関西学院大学教授。四月、

ポトナム三十周年記念大会（京都）。

昭和二九年（一九五四）六〇歳 金城学院短期大学教授を兼任。

昭和三〇年（一九五五）六一歳 六月、「近代短歌史 明治篇」

（博士論文刊行）

昭和三一年（一九五六）六二歳 十一月二十七日急逝。三十日、

紫野上野町光念寺において告別式。法号「清泉院映睿瑞光藤雲居士」。洛東、法然院に葬る。

眼を病めば夕暮どきの明るさを恋ほしみてひとり室にこもらふ

暮れぐれの明るきなかに見ゆるもの今日の終の庭の木・石

物見ればたちまち涙にじみくる眼をばぬぐひつつしばら

くはあり

昭和三年

歌集『くさぶち以後』（昭三五・一一）

昭和三年（一九五七）五月、「ポトナム」小泉芝三先生追悼号。
昭和五〇年（一九七五）十一月二十四日、法然院山内に歌碑を建
立。除幕式を行う。

あまつたふ月よみの光流れたりしらとして遠き草原

十一月、「小泉芝三歌集」

平成六年（一九九四）四月、「ポトナム」小泉芝三生誕百年記念

特集

「小泉芝三氏をいたむ」

久松 潜一

小泉氏は水篋の出身の歌人であり、後にポトナムを主宰された
がそんなことからポトナムは何時もいただいて居り、六帖詠草の
講義を誌上で連載した時には私も一二回筆をとつたと覚えてゐ
る。氏は万葉集の大伴家持に関する著書もあるが、後には明治和
歌史の研究に没頭され、資料を丹念に集められ、明治大正の短歌
の資料大成をまとめられた。明治の主要な歌論の本文を集成され
た一冊などは私も大いに恩恵をうけた。京都に参つた時、立命館
大学の研究室でそれらの資料のある部屋を案内され、一見したこ
とがあるが、よく集められたと感心した。その後、明治短歌史を

まとめられ東洋大学に学位論文として提出された時は、杉浦資俊
氏と二人で審査に当つた。その論文も精細な研究であつたが、私
は丹念に集められ、資料大成としてまとめられたそれと併せて即
ちその基礎の上に成立した史的研究として価値あるものと思つ
た。明治短歌史家として氏の学界に遺された功績は大きいのであ
る。

（うへだ・ひろし 本学教授）